

ずいそう



## 「司馬遼太郎記念館」 を訪ねて

木村 統一

2001年11月1日、「司馬遼太郎記念館」がオープンした。記念館は、東大阪市の住宅街にある故司馬遼太郎氏の自宅に隣接して建てられた。

司馬遼太郎に傾倒して30余年なるが、司馬文学との出会いが、私の人生にとってどれほどの影響があったのかは計り知れない。記念館を訪れることは私にとって、いかに心弾むものであったかお分かり頂けるものと思う。

記念館の正門は、ちょうど自宅の前庭に位置しており、自然をこよなく愛した司馬氏らしく、庭は様々な樹木によって雑木林風に仕立てられている。束の間、この庭を散策しながら記念館へと足を運ぶことになるのだが、途中、自宅の窓越しに執筆当時のままの状態で残された書斎を見ることができ、しばし感慨に耽る。

弧を描く記念館のコンクリート壁に沿った回廊を進み、エントランスを入ると、展示室の光景はまさに圧巻である。展示室は地下1階から2階部分までが3層の吹き抜けとなっており、その空間の壁面全てを2,300余の書架が覆う。2万冊を超える司馬氏の蔵書が、白のスタンドグラスから射し込む光を控えめに浴びて展示されている。その光景を前に、「司馬氏の膨大な資料や文献を後世に伝えると共に、司馬氏の世界観・頭脳をイメージして設計した」という安藤忠雄氏の言葉に納得がいく。

展示室の一画には、第42回直木賞を受賞した『梟の城』から、小学校6年生の国語の教科書に掲載されている『21世紀に生きる君たちへ』まで、代表作品の自筆原稿や題字の色紙等が時系列に展示されている。

司馬氏の作家としての起源は、学徒兵として太平洋戦争を経験したことにある、ということとは本人の談から広く知られている。いつの頃から、こんな馬鹿げた戦争を始めたようなつまらない日本人が出てきたのか。それ以前には多く存在していたであろう魅力的で素晴らしい日本人を掘り起こすべく、4万冊を超える膨大な資料から、長い時間をかけて蒸留されたのが、数多くの司馬作品というわけである。

その中でも、私にとって最も感懐を抱く作品の一つが『21世紀に生きる君たちへ』である。

私は、この作品から放たれるメッセージを考えると、司馬氏の苦悶を感じずにはいられない。有名な作品だけに改めてここに紹介するのも気が引けるのだが、司馬氏から次代を担う「君たち」に対して、自然を畏怖する心、自己の確立、助け合う心、たのもしさを持つように語りかけ、「君たち」に希望を託している。その背景には、人としてあるべき根底が喪失してきていることへの危機感にはかならないのではないだろうか。

司馬氏が強く訴え続けてきたのは、土地問題である。高度経済成長、日本列島改造、バブル経済を構成していた「土地を投機の対象とすること」は、極めて深刻な事態であることを、司馬氏はかなり早い時期から警鐘を鳴らしている。記念館のホールでは、司馬氏の半生を要約したビデオを上映していたが、その中で聞ける亡くなる直前に田中直毅氏と対談した際の肉声が全てを物語っている。

「戦後社会は、倫理も含めて土地問題によって崩壊するだろう」

「バブルを引き起こした国民の意識の低下に、われわれ国民全体が危機意識を持たなければ、ジリ貧どころか、日本という国がなくなってしまうかも分からない」と辛辣極まりない。

このように、「21世紀を生きる君たち」に希望を託す一方で、司馬氏はその著作、講演、対談などにおいて、日本に対する危惧をより一層強く訴えている。戦後は、軍国主義の時代から解放され、新しい憲法のもとで自由な空気を謳歌しているかのように見えても、土地問題が日本を太平洋戦争よりももっと悲惨な状況にしているのではないかと、とも提起している。

司馬氏は小説の執筆活動において、歴史の中から魅力的な日本人というものを世に知らしめ、ひとびとに希望を与えた。しかし、その一方では、この国の現在の惨状を訴え、日本という国が滅びてしまうと憂い、希望が持てぬまま、むしろ絶望してこの世を去られたのではないかと、私は考えてしまう。希望が持てないながらも、ほんのわずかな可能性に希望を託さざるを得なかったのが『21世紀に生きる君たちへ』なのだとは捉えている。決して、前途洋々の若者を賛美しているだけではない。鎌倉時代の武士の「たのもしさ」を取りあげているように、われわれの祖先が長い歴史の中で大切に守ってきたことを、一瞬の間に失ってしまうことへの警告のようでもある。

今、司馬遼太郎記念館を訪れ、私は改めて司馬氏の苦悶を感受したように思うのである。